オランダからドイツへの傾斜と偏重

増山雄三

日本は周知のように、十九世紀半ば過ぎてから、異質なヨーロッパ文明を受容したが、それも植民地化によるものではなく、自らの意思によってそのようにしたが、それらは無論自前のもので、どの国からもヒモも付かずに、いかなる選択も日本自身がした。

それでも、それについて、そんな事をするより、むしろ、江戸時代をそのまま続けてもよかったのではないか、という声も聞こえるが、もしそうだったら、十中八九、どこかの植民地になっていたに違いない。

時代にはその時代にしかない気分があり、当時、中国清のような植民地になりたくないという、共通の気分が湧きたっていたので、この感情の爆発が明治維新を起こさせ、その後の欧化を許容したといってもよいのだろう

が、それなら馴染の「オランダ」はどうか、という話になってくるだろう。

というのは、江戸期には、日本にとってのオランダは、ヨーロッパ文明そのものであって、医学や理化学もオランダ語によって学んだし、またペリー来航以後、幕府が長崎に設けた海軍教育機関も、オランダ式だった。

また、オランダ王国の政体もよく知られていたが、例えば、当時土佐の高知城下の小さな蘭学塾でさえ、教材としてオランダの本が使われていて、若い坂本龍馬の開明思想に、少なからぬ影響を与えた。

さらに、幕府は人文科学系の留学生もオランダに派遣し、留学生の一人だった西周は、ライデン大学で法学と哲学を学び、明治初年における、文明受容のための日本語対訳を、大量に作って国内に齎したのである。

が、維新翌年の明治二年（一八六九年）という早い時期に、日本政府はオランダ医学を捨ててしまうが、そうすべく政府の要職に説

いてまわったのは、相良知安と岩佐純という二人の蘭学者で、彼らはオランダの医学書の多くが、ドイツ医学書からの翻訳である事を知り、「ドイツ医学に転換すべきだ！」といって、強力に主張したのだ。

といっても、彼らはドイツ語もまたなまのドイツ人さえ知らないほど、幕末の日独関係は希薄だったが、わずかに万延元年（一八六〇年）に、プロイセン王国の艦隊が江戸湾に入り条約が結ばれ、代理公使がかの国からやってきた程度の、関りでしかなかった。

でありながら、明治政府は二人の献策を入れ、早速プロイセンから二人の医学教授を受け入れ、彼らが東京に着任したのは明治四年八月で、日本が片想いのままドイツを選択した、記念すべき年になったのである。

それでも、もともと日本をペリー艦隊の示威で開国させたのは、アメリカ合衆国だったが、ただアメリカは、その後南北戦争（一八六一～六五年）がおこって、幕末における対

日外交が手薄になっていたが、一方、英国は米国より後発ながら、抜きんでて能動的な対日外交を展開した。

英国の場合、薩摩藩と一八六三年に一旦は局地戦争をしたが、そのあと異様なほど双方が親密になったのは、当時、フランスが幕府を独り占めして、過度に肩入れしていた流れが進んでいたのが、気に食わなかったため、薩摩藩を密かに後押ししていたのだ。

それでも、明治政府は冷静で、例えば、英国公使にすれば、医学についても、当然英国人が雇われるものと信じていたが、日本は、見も知らぬドイツを選び、英語圏については旧制中学の語学を英語にしたのと、海軍を英国式にしたぐらいのものだった。

さらに、陸軍がドイツ式を選んだのは、日本が明治維新起こして四年目（一八四一年）に、プロイセン軍がフランス軍を破った事が大きく影響し、在欧中の日本武官は、目の前で鼎の軽重を見てしまったからだ。

彼らは、ドイツ参謀部の作戦能力の卓越性と、部隊の運動の的確さを見て仏独の対比をし、その上、プロイセンはこの勝利を基礎にして、連邦を解消してドイツ帝国を作ったので、ほんの数年前、明治政府を興した日本人にとって、強い感情移入を持ってしまった。

そして、憲法についてもそうで、明治十年以降に様々な検討を行ったが、フランス憲法は過激すぎる印象があり、英国は大隈重信が推薦したが、結局はドイツの後進性への親近感が勝り、ヨーロッパにも田舎臭い国があったのかと驚き、共感したのだ。

明治二十二年の憲法発布の時には、陸軍は全くドイツ式になってしまい、その作戦思想が、後の日露戦争の陸戦において有効だったという事で、愈々ドイツ式への傾斜が進んでいき、やがて昭和に入って、陸軍の高級軍人の考え方が、明治の軍人にくらべ、はるかにドイツ色が濃くなった。

明治の軍人の思考法には、経験主義がかな

り入っていたが、それは要するに、優れた江戸時代人だったからだが、それに引きかえ昭和の高級軍人は、あたかもドイツ人になったかのように、独楽のように論理が旋回し、周りには目を向ける事をしなかった。

陸軍が統帥権を根拠にして、日本国を壟断しはじめるのは、昭和十年前後だが、外政面でまずやったのは、外務省や海軍の反対を押し切って、「ヒットラー・ドイツ」と組む事だったが、それは明治後の、拙速なドイツ文化導入の罪などではなかった。

ただいえることは、一種類の文化を濃縮注射すれば、当然、薬物中毒にかかるという事で、そういった患者たちに、全ての権力を握られるとどうなるかは、日本近代史の動物実験のように、雄弁に物語っている。

戦後、「昭和軍事秘話」という本が出版されたが、その中に旧軍人の話が纏められているが、多くのものが、堅牢な批判精神で往時が語られており、先入観でモノを見るべきで

ないという、証明の役まで果している。

その中で、陸士三十七期の中原元大佐は、昭和のあの時代を、「国力を全く無視して、作戦ばかりをやっていた時代」といっているが、自身の事については、昭和十二年の支那事変勃発の際には、大阪弾丸工場の工場長をしていたという。

そして、陸士から陸大をへて東大工学部を卒業して、卒業後、陸軍造幣廠や大本営兵站総監部参謀等を経て、戦争資材の調達にも関わったというが、当時、陸大を出てドイツに留学していない人達は、有力部員になっていないので、日独伊同盟を作る総長や次官に大臣などは、皆ドイツ留学組だったという。

さらに、昭和二十年に日本が敗れるまでの参謀本部のポストについたのは、全てドイツ留学組で、陸軍における、ドイツ傾斜や偏重というのは、一種の「国家病」の一つだったとしか思えない、と当時を回顧している。

令和三年十二月